

京呂組は桁梁を柱で受け、梁は兜蟻（かぶとあり）、渡り顎（わたりあご）等でとめ付けます。この兜蟻については、引張耐力、変形性能が低いため、注意を要します。下記の注意事項 1, 2 として示します。

兜蟻の注意事項 1

- 兜により 60mm 以上の十分なかかり代を確保する。
- 引張に抵抗できる仕口が区画 4000mm 以内にあること（図 6.1 a）。
- 小屋梁と直交する地棟、受梁等を概ね 4000mm 以下の位置に設ける。これらは兜蟻を用いた小屋梁の落下防止措置である（図 6.1 b）
- 頭つなぎ、梁つなぎ等は仕口の規制をかけない。
- 内部の受梁の最小寸法を 120mm×240mm とする。

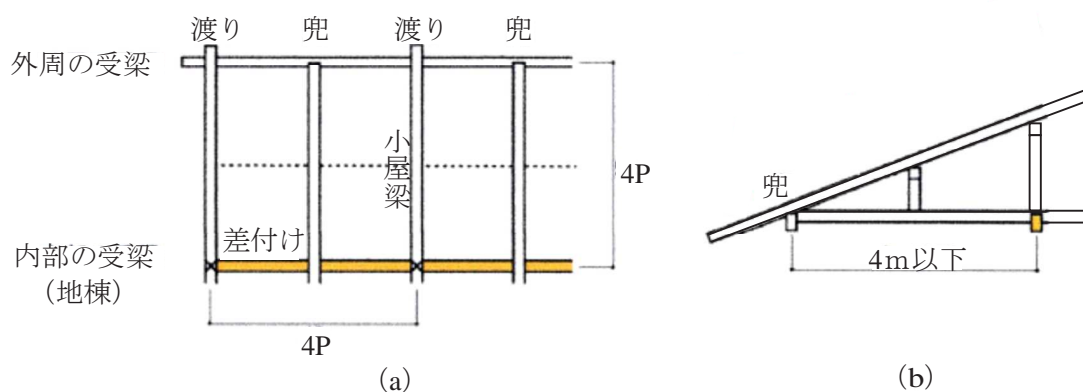


図 6.1 兜蟻の注意事項 1

兜蟻の注意事項 2

引張に抵抗できる仕口の区画が 6000mm 以内の場合。（図 6.2）
 小屋梁と直交する地棟、受梁等を概ね 4000mm 以下の位置に設ける。
 受梁の柱支点の差ほぞ部に損傷が発生する可能性あり。4000mm 間に柱 3 本設置または柱を 135mm×135mm にする。
 内部の受梁の最小寸法を 165mm×240mm とする。

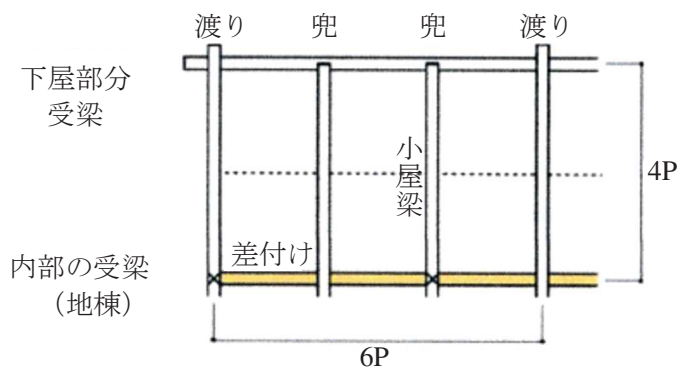
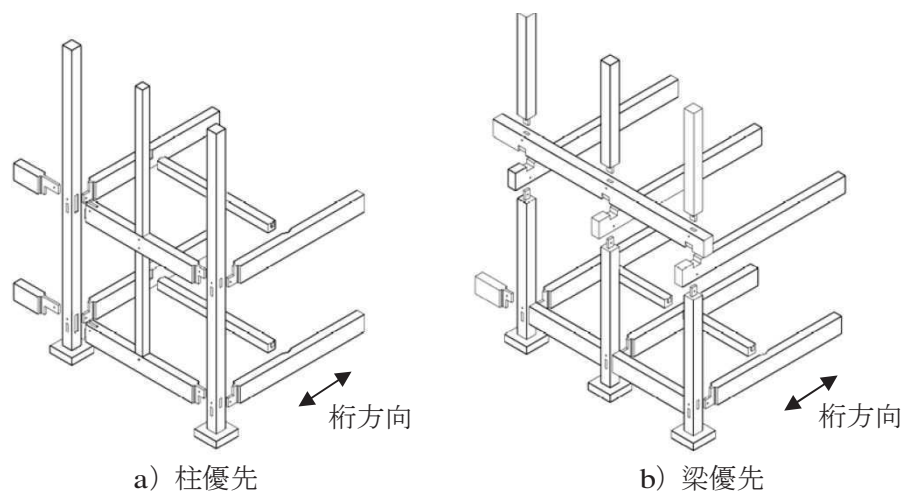


図 6.2 兜蟻の注意事項 2

床梁の柱優先，梁優先の形状は下図に示します。



通し柱に桁と梁を込み栓，車知，鼻栓等でとめる。梁と梁は渡りあご，差付け，平ほぞ（蟻掛け）の仕口とする。

柱と桁は長ほぞ込み栓でとめ、梁と桁は渡りあごでとめる。

図 6.4 柱優先・梁優先の場合の継手・仕口の例

梁－梁継手を蟻掛けとする場合は、その仕口が引張耐力，変形性能が低いことから別途蟻掛けの注意事項 1，2 が示されています。設計法（案）の図 6.5，6.6 を参照して下さい。

- ・継手・仕口は代表的なものとして、表 6.1, 6.2 に示しています。これ以外にも、実験等から耐力、変形性能が確認されているものは使用できます。

表 6.1 継手の選定表

部位		仕様
小屋組(外周部)	外周部	金輪、追掛大栓
小屋組(内部)	内部	金輪、追掛大栓、台持ち
軸組(外周部)	外周部	金輪、追掛大栓
軸組(内部)	内部	金輪、追掛大栓、台持ち
土台		腰掛蟻継

表 6.2 仕口の選定表

部位		仕様
小屋組		渡り顎、差し付け、平ほぞ、兜蟻
軸組(梁、梁)	梁－梁	渡り顎、差し付け、平ほぞ、蟻掛け
軸組(柱、梁)	柱－梁	小根ほぞ差、車知、鼻栓
軸組(柱、足固め)	柱－足固め	小根ほぞ差、車知、鼻栓

※差し付けは差付けとも書きます

外周部の梁継手、柱と梁の仕口には特に大きな引抜力が生じるため、引抜力により破壊が生じない仕様とする必要があります。外周部の継手・仕口についてはこれと同様以上を工夫しましょう。渡り顎や兜蟻の即近に構造要素がある場合、梁間や梁中央での台持ち継ぎは好ましくありません。金輪継ぎ、追掛大栓継ぎにしましょう(図6.7)。梁－梁継手は金輪、追っかけ大栓、台持ち等引張に抵抗できる接合にすることを原則とします。

梁－梁継手の位置については曲げモーメントの影響を受けない仕様として、大きな曲げモーメントが生じない位置にとします。

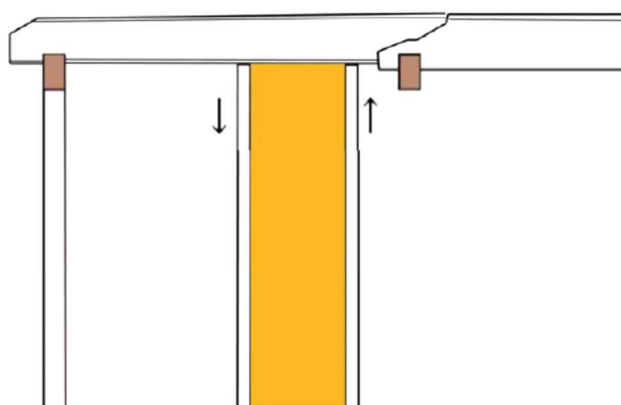


図6.7 構造要素近傍での継手例